

『論語集注』 訳注 (子罕第九 (二))

Annotations and Translations of "Lunyu Jizhu" (9) (Part 2)

孫 路 易
SUN Luyi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第61号 2026年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.61 2026

『論語集注』 訳注（子罕第九（二））

孫 路 易

第六章

大宰問於子貢曰、夫子聖者與。何其多能也。子貢曰、固天縱之將聖、又多能也。子聞之、曰、大宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。牢曰、子云、吾不試、故藝。

〔「大宰」は、呉国の大夫詬のことである。「天縱」は、「天の許した」の意であるが、ここでは、つまり、天が孔子に対しては、その行うことと知ることの限度を設けない、ということである。「將聖」は、「聖人に近い」の意だが、「聖人だ」と断言することを避けた謙虚な言い方である。「多能」は、「釣」（魚を釣る）、「弋」（鳥を射る）などの技能から礼楽などの芸能までの多くの「技芸」ができる、ということであるが、「鄙事」としての「多能」は、「釣」、「弋」などのようなつまらない技能のことである。「牢」は、孔子弟子の子牢のことである。）
大宰が子貢に尋ねた。「孔子は聖人でしょうか。なんと多能ですね。」子貢は答えた。「もともと天の許した聖人に近いのですし、しかも多能です。」孔子はその話を聞いて言われた。「大宰は私のことを知る人だろう。私は、年少の頃は貧賤だった、だから多くの鄙事ができるのだ。君子は多能だろうか。多能ではないのだ。」子牢が言った。「孔子

は「私は世間に用いられなかったがために、そこで多くの技芸を身に付けたのだ。」とおっしゃった。」

集注

大、音泰。與、平聲。○孔氏曰、大宰、官名。或吳或宋、未可知也。與者、疑辭。大宰蓋以多能為聖也。

縱、猶肆也、言不為限量也。將、殆也、謙若不敢知之辭。聖無不通、多能乃其餘事、故言又以兼之。

言由少賤故多能、而所能者鄙事爾、非以聖而無不通也。且多能非所以率人、故又言君子不必多能以曉之。

牢、孔子弟子、姓琴、字子開、一字子張。試、用也。言由不為世用、故得以習於藝而通之。○吳氏曰「弟子記夫子此言之時、子牢因言昔之所聞有如此者。其意相近、故并記之。」

訳

「大」は、「泰」と発音する。「與」は、平声（ここでは、第二声、疑問の「か」の意）である。○孔氏（孔安国、字は子国、孔子の後裔、前漢の学者¹）が言った。「大宰は、官名なり。或ひは呉なるか、或ひは宋なるか、未

「だ知る可からざるなり。」(つまり、「大宰」は、大夫の官職の名称である。呉国であるか、宋国であるかは、不明である、ということ。『論語注疏』の邢昺疏によれば、当時ただ呉、宋の二国だけが上大夫を「大宰」と称していた。²⁾「與」は、疑問の言葉(つまり、疑問の「か」の意)である。「大宰」蓋し多能を以て聖と為すなり。」(つまり、呉国の大夫語はそもそも、「多能」(つまり、「釣」(魚を釣る)、「弋」(鳥を射る)などの技能から礼楽などの芸能までの多くの「技芸」ができること³⁾)を「聖」としたのである、ということ。『論語鄭氏注』には、「大宰は、呉の大夫、名は語。」(「大宰」は、呉国の大夫で、名は語である。)とあり、鄭玄は、この「大宰」とは呉国の大夫語のことだと解釈している。⁴⁾

「縦は、猶ほ肆にするのときなり、限量を為さざるを言ふなり。」(つまり、「縦」は、ここでは、「放縦」(つまり、放任すること、束縛しないこと)の意味であり、限度を設けないということである、ということ。即ち、天が聖人に対しては、放任してその行うことと知ることには限度を設けていない、ということである。⁵⁾「将は、殆なり、謙して敢へて知らざるの若くするの辞なり。」(つまり、「将」は、「殆」(つまり、「庶幾」、ここでは、「近い」の意)であり、断言することを避けるような謙虚な言葉使用である、ということ。「将聖」とは、「聖人に近い」の意であるが、実際、「孔子は、天が行うことと知ることに限度を設けない聖人だ。」ということの謙虚な言い方である。⁶⁾「聖は通ぜざること無く、多能は乃ち其餘事、故に「又た」と言ひて以て之を兼ね。」(つまり、聖人は事物に対して通じないことはなく、「多能」(詳しくは、本章の注(3))はその「余事」であり、それ故に、「ま

た」と言つて「多能」を兼ねたのである、ということ。聖人は「徳を尚びて芸を尚はず」(徳を尊んで芸を尊ばない)のだから、「余事」とは、ここでは、つまり、徳を主とすることを兼ねて様々な「技芸」を身に付けた、その「技芸」のことである。聖人は当然「多能」であるが、朱子は、当時のただ多く学んで「多能」になっただけの人のことを、ただの「雜骨董」(つまり、雑な古い「技芸」を身に付けた人)と批評したのである。⁷⁾

「言ふところは少して賤しきに由り、故に多能にして、能くする所の者は鄙事のみ、聖を以てして通ぜざること無きに非らざるなり。」(つまり、その語の意味はこうである。少年の頃は貧賤だったがために、そこで「多能」(ここでは、つまり、「釣」(魚を釣る)、「弋」(鳥を射る)などのような技能を身に付けたこと)であり、身に付けたものはつまらない技能ばかりであり、聖人だからと言つてそれらのことに通じないことはないということではない、ということ。聖人は、「多材多芸」であり、その「材芸」の行い方はまたすべて、他の人々のやり方とは異なるものである。例えば、「子、釣して網せず、弋して宿を射ず。」(孔子は、一本の釣り竿で魚を釣ることはされるのだが、目の細かい大きな網を、川に横切る形で川に入れて魚を取ることはされませんでしたし、生糸を矢に繫いで鳥を絡めるように射ることはされるのだが、夜に巢に寝ている鳥を射ることはされませんでした。詳しくは本章の注(3))が一例である。⁸⁾「且つ多能は以て人を率ゆる所に非ず、故に又た君子必ずしも多能ならざるを言ひて以て之を暁す。」(つまり、また「多能」だからと言つて人々を率いることができるものでもなく、それ故に、また君子は必ずしも「多能」ではないのだと言つて子貢を論し

たのである、ということ。子貢のいう「固より天縱の將聖にして、又た多能なり。」(もともと天が行うことと知ることに限度を設けない聖人に近いのですし、しかも多能です。)は、孔子の「本分」「理」に従ってのするべきこと)を述べたものであるが、孔子が「君子多ならんや。多ならざるなり。」(君子は多能だろうか。多能ではないのだ。)とおっしゃったのは、「謙辭」(つまり謙虚な言葉)である。⁹⁾

「牟」は、孔子の弟子であり、姓は琴、字は子開、もう一つの字は子張。「試は、用ひるなり。」(つまり、「試」は、用いることである、ということ。當時世間に任用されなかったがために、多くの「技芸」を身に付けた、と孔子が自述されたのである。¹⁰⁾その意味はこうである。世間に用いられなかったがために、そこで「技芸」を習ってそれらに通じるようになったのである。○吳氏(吳棫、字は才老、宋代の学者)が言った。「孔子の弟子が、孔子のこの語を記録した時に、子牟が昔このようなことを聞いたことがあったと言ったのにより、この主旨が相近かったから、そこでここに合わせてこれをも記録したのである。」

注

(1) 『史記』孔子世家「孔子生鯉、字伯魚。伯魚年五十、先孔子死。伯魚生伋、字子思、年六十二。嘗困於宋。子思作中庸。子思生白、字子上、年四十七。子上生求、字子家、年四十五。子家生箕、字子京、年四十六。子京生穿、字子高、年五十一。子高生子慎、年五十七、嘗為魏相。子慎生鮒、年五十七、為陳王涉博士、死於陳下。鮒弟子襄、

年五十七。嘗為孝惠皇帝博士、遷為長沙太守。長九尺六寸。子襄生忠、年五十七。忠生武、武生延年及安國。安國為今皇帝博士、至臨淮太守、蚤卒。安國生卬、卬生驪。」「漢書」志・藝文志「武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尚書及禮記、論語、孝經凡數十篇、皆古字也。共王往入其宅、聞鼓琴瑟鐘磬之音、於是懼、乃止不壞。孔安國者、孔子後也、悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇。安國獻之。遭巫蠱事、未列于學官。」「漢書」儒林傳「孔氏有古文尚書、孔安國以今文字讀之、因以起其家逸書、得十餘篇、蓋尚書茲多於是矣。遭巫蠱、未立於學官。安國為諫大夫、授都尉朝、而司馬遷亦從安國問故。」

(2) 『論語集解』子罕「大宰問於子貢曰、夫子聖者與。何其多能也。」何晏注「孔安國曰、大宰、大夫官名也。或吳或宋、未可分也。疑孔子多能於小藝也。」「論語注疏」子罕「大宰問於子貢曰、夫子聖者與。何其多能也。」何晏注「孔曰、大宰、大夫官名、或吳或宋、未可分也。疑孔子多能於小藝。」邢昺疏「正義曰、云「大宰、大夫官名」者、案周禮、大宰六卿之長、卿即上大夫也、故云大夫官名也。云「或吳或宋、未可分也」者、以當時惟吳、宋二國上大夫稱大宰、諸國雖有大宰、非上大夫、故云「或吳或宋、未可分也」。鄭云「是吳大宰詔也」。以左傳哀十二年、「公會吳于橐臯、吳子使大宰嚭請尋盟。公不欲、使子貢對、又子貢嘗適吳、故鄭以為是吳大宰詔也。」

(3) 『史記』孔子世家「孔子貧且賤。及長、嘗為季氏史、料量平。嘗為司職吏而畜蕃息。由是為司空。」「論語注疏」子罕「吾少也賤、故多能

鄙事。」何晏注「包曰、我少小貧賤、常自執事、故多能為鄙人之事。」

『論語集注』述而「子釣而不網、弋不射宿。」朱子注「網、以大繩屬網、絕流而漁者也。弋、以生絲繫矢而射也。宿、宿鳥。洪氏曰「孔子少貧賤、為養與祭、或不得已而釣弋、如獵較是也。然盡物取之、出其不意、亦不為也。此可見仁人之本心矣。待物如此、待人可知。小者如此、大者可知。」」朱子語類 論語十八·子罕篇上·大宰問於子貢

章「問「吾不試、故藝」。曰「想見聖人事事會、但不見用、所以人只見它小小技藝。若使其得用、便做出大功業來、不復有小小技藝之可見矣。」問「此亦是聖人賢於堯舜處否。」曰「也不須如此說。聖人賢於堯舜處、却在於收拾累代聖人之典章、禮樂、制度、義理、以垂於世、不在此等小小處。此等處、非所以論聖人之優劣也。橫渠便是如此說、以為孔子窮而在下、故做得許多事。如舜三十便徵庸了、想見舜於小事也煞有不會處。雖是如此、也如此說不得。舜少年耕稼陶漁、也事事去做來、所以人無緣及得聖人。聖人事事從手頭更歷過來、所以都曉得、而今事事都不會。最急者是禮樂、樂固不識了、只是日用常行吉凶之禮、也都不會講得。」朱子語類 論語十六·述而篇·我非生而知之者章「問「我非生而知之者、好古敏以求之者。」聖人之敏求、固止於禮樂名數。然其義理之精熟、亦敏求之乎。」曰「不然。聖人於義理合下便恁地。「固天縱之將聖、又多能也。」敏求、則多能之事耳。其義理完具、禮樂等事、便不學、也自有一副當、但力可及、故亦學之。」

(4) 『論語鄭氏注』子罕「大宰問於子貢曰、夫子聖者與。何其多能也。」鄭玄注「大宰、吳大夫、名駘。」

(5) 『朱子語類』論語十八·子罕篇上·大宰問於子貢章「問「天縱之將聖。」

「縱、猶肆也、言不為限量、何如。」曰「天放縱聖人做得恁地、不去限量它。」問「如此、愚不肖是天限量之乎。」曰「看氣象、亦似天限量它一般。如這道理、聖人知得盡得、愚不肖要增進一分不得、硬拘定在這裏。」

(6) 『朱子語類』論語十八·子罕篇上·大宰問於子貢章「將聖」、殆也。殆、庶幾也、如而今說「將次」。「將」字訓「大」處多。詩中「亦孔之將」之類、多訓「大」。詩裏多協韻、所以要如此等字使。若論語中、只是平說。『朱子語類』學六·持守「大凡氣俗不必問、心平則氣自和。惟心粗一事、學者之通病。橫渠云「顏子未至聖人、猶是心粗。」一息不存、即為粗病。要在精思明辨、使理明義精、而操存涵養無須與離、無毫髮間、則天理常存、人欲消去、其庶幾矣哉。」朱子語類 易十二·繫辭下·右第四章「其殆庶幾乎。」殆、是幾乎之義。又曰「是近。」又曰「殆是危殆者、是爭些子底意思。」又曰「或以「幾」字為因上文「幾」字而言。但左傳與孟子「庶幾」兩字、都只做「近」字說。」周易本義「繫辭下傳「子曰、顏氏之子、其殆庶幾乎。有不善、未嘗不知知之、未嘗復行也。」朱子注「殆、危也。庶幾、近意、言近道也。」

(7) 『朱子語類』論語十八·子罕篇上·大宰問於子貢章「先生曰「太宰云「夫子聖者歟。何其多能也。」是以多能為聖也。子貢對以夫子「固天縱之將聖、又多能也」。是以多能為聖人餘事也。子曰「吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」是以聖為不在於多能也。三者之說不同、諸君且道誰說得聖人地位著。」諸生多主夫子之言。先生曰「太

宰以多能為聖、固不是。若要形容聖人地位、則子貢之言為盡。蓋聖主於德、固不在多能、然聖人未有多能者。夫子以多能不可以律人、故言君子不多、尚德而不尚藝之意、其實聖人未嘗不多能也。」また、「又曰「聖人自是多能。今若只去學多能、則只是一箇雜骨董底人、所以說「君子多乎哉。不多也。」『朱子語類』周子之書・志學一因說「耿守向曾說「用之則行、舍之則藏、惟我與爾有是夫。」此非專為用舍行藏、凡所謂治國平天下之具、惟夫子顏子有之、用之則抱持而往、不用則卷而懷之。」曰「某不敢如此說。若如此說、即是孔顏胸次全無些洒落底氣象、只是學得許多骨董、將去治天下。」」

(8) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・大宰問於子貢章「問「夫子多材多藝、何故能爾。」曰「聖人本領大、故雖是材藝、他做得自別。只如禮、聖人動容周旋、俯仰升降、自是與它人不同。如射亦然。天生聖人、氣稟清明、自是與它人不同。列子嘗言聖人力能拓關、雖未可信、然要之、聖人本領大後、事事做得出來自別。」」

(9) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・大宰問於子貢章「問「太宰初以多能為夫子之聖。子貢所答方正說得聖人體段。夫子聞之數語、却是謙辭、及有多能非所以率人之意。」曰「固是。子貢說得聖人本分底、聖人所說乃謙辭。」『朱子語類』孟子七・離婁下・仲尼不為己甚章「仲尼不為己甚、言聖人所為、本分之外不加毫末。如人合喫八棒、只打八棒。不可說這人可惡、更添一棒。稱人之善、不可有心於溢美。稱人之惡、不可溢惡、皆不為己甚之事也。」

(10) 『論語注疏』子罕「牢曰、子云、吾不試、故藝。」何晏注「鄭曰、牢、

弟子子牢也。試、用也。言孔子自云、我不見用、故多技藝。」邢昺疏「○正義曰、此章論孔子多技藝之由、但與前章異時而語、故分之。牢、弟子琴牢也。試、用也。言孔子自云「我不見用於時、故多能技藝。」○注「牢、弟子子牢也。」○正義曰、『家語弟子篇』云「琴牢、衛人也、字子開、一字張。」此云弟子子牢、當是耳。」

(11) 趙順孫(一一二五—一二七六、字是和仲、格齋先生)『論語纂疏』「吳氏曰、弟子記夫子此言之時、子牢因言昔之所聞有如此者。其意相近、故并記之。」『論語纂疏』學而「子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信。雖曰未學、吾必謂之學矣。」纂疏「吳氏曰、子夏之言、其意善矣。然詞氣之間抑揚太過、其流之弊、將或至於廢學、必若上章夫子之言、然後為無弊也。」(吳氏、名棫、建安人。)' 『朱子語類』論語一・語孟綱領「建安吳才老作論語十說、世以為定夫作者、非也。其功淺、其害亦淺。又為論語考異、其功漸深、而有深害矣。至為語解、即以己意測度聖人、謂聖人為多詐輕薄人矣。徐歲為刊其書越州以行。」『朱子語類』雜類「近世考訂訓釋之學、唯吳才老・洪慶善為善。」

第七章

子曰、吾有知乎哉。無知也。有鄙夫問於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉。

〔知〕は、ここでは、動詞の「識」「知識」であり、つまり、事物の

性質（「性」「理」）を認識することができる、ということである。「無知」とは、孔子が自分を「至愚」の「鄙夫」のレベルに合わせて謙っておっしゃったものである。「鄙夫」とは、凡庸且つ卑劣、人に媚びて相手を喜ばせ、人に迎合して相手に好かれようとする、こういう人のことであるが、ここでは、本章の集注にいう「至愚」に当たり、「至愚」とは、事物の性質（「理」「性」）を認識する能力がない人のことである。「空空如也」は、「鄙夫」のことを指して言うものであり、「空空」は「得る所無し」「有る所無し」ともいう「何の知識も持っていない」ということである。「兩端」とは、ただ「起止」の二字に過ぎない。「この端からあの端まで」のような意味である。「終始、本末、上下、精粗、尽くさざる所無し。」という場合は、つまり、初めから終わりまで、本から末まで、上から下まで、精から粗まで、ほんの少しの尽くさないものはない。」という意味である。）

孔子が言われた。「私に知（つまり、事物の性質（「性」「理」）を認識することができること）があろうか。知がないのだ。ある鄙夫（つまり、事物の性質（「理」「性」）を認識する能力がない人）が私に尋ねたが、（その鄙夫は）何の知識も持っていないようで、私はその「兩端」を啓発して尽くすのだ（つまり、私は、自分の持っている知識を教え尽くさないことはないように気を配ったのだ、ということ）。」

集注

叩、音口。○孔子謙言已無知識、但其告人、雖於至愚、不敢不盡耳。叩、

發動也。兩端、猶言兩頭。言終始、本末、上下、精粗、無所不盡。○程子曰「聖人之教人、俯就之若此、猶恐衆人以為高遠而不親也。聖人之道、必降而自卑、不如此則人不親。賢人之言、則引而自高、不如此則道不尊。觀於孔子、孟子、則可見矣。」尹氏曰「聖人之言、上下兼盡。即其近、衆人皆可與知。極其至、則雖聖人亦無以加焉、是之謂兩端。如答樊遲之問仁知、兩端竭盡、無餘蘊矣。若夫語上而遺下、語理而遺物、則豈聖人之言哉。」

訳

「叩」は、「口」と発音する。○「孔子謙して己に知識無きを言ふ。」（つまり、孔子は謙って自分に「知識」がないとおっしゃった、ということ。「知識」は、「知識は便ち是れ這箇の物事の好悪を察識し得る。」とあり、ここでは、つまり、事物の「好悪」（「性」「理」、つまり、性質）を認識することができる、ということである。これは、「動靜語黙」（つまり日常に行われている言行）を兼ねて言ったものである¹）しかし、その「人に告ぐる」（つまり、人に教える²）時は、「至愚」（朱子にあっては、聖人にも愚人にも同じ「性」（仁義礼智）が備わっているが、ただ、稟受した氣質が異なるがために、聖人と愚人との違いが生じたのである。「至愚」は、本章原文にいう「鄙夫」に当たるものようであるが、「鄙夫」とは、「庸愚陋劣」（愚昧且つ卑劣）「阿徇以て容を為し、逢迎以て悦を為す」（人に媚びて相手を喜ばせ、人に迎合して相手に好かれようとする）、こういう人のことである。本章原文にいう「空空如也」は、「鄙夫」のことを指して言うものであり、「空空」は「得る所無し」「有る所無し」ともいう「何の知識も持っていない」とい

うことである。「鄙夫」は無学な人のことであるが、これに対して、「至愚」とは、「至愚無識」の意であり、つまり、事物の性質（「理」「性」）を認識する能力がない人のことである。かかる「至愚」^③に対して、「敢へて尽くさずんばあらざるのみ。」（つまり、自分の持っている知識を教え尽くさないことはないように気を配ったのである、ということ。「尽」とは、教え尽くすことであるが、つまり、本章の集注にいう「終始、本末、上下、精粗、尽くさざる所無し。」のことである。詳しくは、後述。）「叩」は、「発動なり。」（ここでは、つまり、「啓発」の意である。「啓発」は、「啓は、其の意を開くを謂ふ。発は、其の辞を達するを謂ふ。」（「啓」は、ここでは、その心の中で持っている意志を明確にすることである。「発」は、ここでは、その言葉をその心の中で持っている意志を伝えられるものにする^④ことである。）「両端は、猶ほ両頭を言ふがごとし。終始、本末、上下、精粗、尽くさざる所無きを言ふ。」（つまり、「両端」は、「両頭」のような意味であり、その意味はこうである。初めから終わりまで、本から末まで、上から下まで、精から粗まで、「無一毫之不盡」（ほんの少しの尽くさないものはない）、ということ。朱子は、「竭兩端」^⑤について、「言徹頭徹尾都盡也。」（最初から最後まですべて尽くすことを言うのである。）「兩端只是箇「起止」二字、猶云起這頭至那頭也。」（「両端」はただ「起止」の二字に過ぎない。「この端からあの端まで」のような意味である。）と説明している。^⑤○程子（程頤、字正叔、伊川先生、明道先生（程顥）の弟、北宋の学者）^⑥が言った。「聖人の人を教へるに、俯して之に就くこと此の若し。猶ほ衆人の以て高遠なりと為して親しまざるを恐るるなり。」（つまり、聖人が人に教える場合、謙っ

て相手のレベルに合わせるることこのようであり、これは、衆人が（聖人の教えは）高遠なものだと思つて馴染まない、このことを心配したためである、ということ。孔子が自分のことを「無知識」と謙つておっしゃったのは、自分を「至愚」の「鄙夫」のレベルに合わせたものである。朱子は、「聖人極其高大、人自難企及、若更不俯就、則人愈畏憚而不敢進。」（聖人は極めて高大（つまりその教えが高遠）であるために、人々は当然それに肩を並べるのが困難であり、もし聖人が謙つて相手のレベルに合わせることをしなければ、人々はより一層遠慮して進もうとしないのだ。」と説明している。）聖人の「道」（ここでは、つまり、教え）は、必然的に引き降ろして自らレベルを下げて、そうしなければ人々が身近に感じないのだ。賢人の言葉は、引き上げて自らレベルを上げて、そうしなければ「道」（ここでは、つまり、賢人の教え）が尊ばれないのだ。孔子（聖人）、孟子（賢人）の言論を見れば、分かるのである。（朱子は、「賢人には未熟なところがあり、人々がその教えにまだ十分信頼して従つておらず、もし引き上げて自らレベルを上げなければ、人々がきつとその教えが浅はかで実践する価値がないと思うはずである。孟子の教えは、人々が皆迂闊と思つて、実際の役に立たないものとしたのである。」と説明している。）^⑦尹氏（尹焞、字は彦明、もう一つの字は徳充、号は和靖、程頤の門人）^⑧が言った。「聖人の言葉は、上から下まですべて尽くし、その身近に感じるところのものは、人々は皆ともに理解することができるし、その段階を極めたところのものは、たとえ聖人であってもこれ以上加えることができない、これを「両端」と言うのである。「樊遲の仁知を問ふに答ふるが如きは」（つまり、「樊遲が仁と知についてお尋

ねしたのに孔子が答えられたようなのは、ということ。樊遲は、孔子弟子で、名は須⁹)、「両端竭尽して、余知無し。」(つまり、両端を尽くして「余知」(つまり、まだ教え尽くさず残した「知」(知識)がない、ということ。「餘蘊」は『論語精義』では「餘知」になっている。ここでは、「餘知」のほうが正しい。「樊遲、仁を問ふ。子曰く、人を愛す。知を問ふ。子曰く、人を知る。」とあるように、「愛人」の一語で「仁」の意味を尽くし、「知人」の一語で「知」の意味を尽くす、このような一語で「両端」(つまり終始、本末、上下、精粗)を尽くせる場合もある¹⁰)。もし上を教えて下を残し、「理」(「則」「徳」「実体」とも言う。「理」とは、事物の「性質」を意味する概念であるが、物体においては、その性質としての機能・能力を指し、実験することによって得た客観的な認識・知識である¹¹)を教えて「物」(つまり事物。本章の注(1))を残すようであれば、どうして聖人の言論であろうか。」

注

(1) 『大学章句』第一章「先致其知。致知在格物。」朱子注「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。格、至也。物、猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也。」「朱子語類」程子之書二「又云「智」字自與知識之「知」不同。智是具是非之理、知識便是察識得這箇物事好惡。」「朱子語類」性理一・人物之性氣質之性「天下之物、至微不至細者、亦皆有心、只是有無知覺處爾。且如一草一木、向陽處使生、向陰處使憔悴、他有箇好惡在裏。」「朱子語類」性理二・性情心意等名義「問「情、意、如何體認。」曰「性、情則一。性是不動、情是動處、

意則有主向。如好惡是情、「好好色、惡惡臭」便是意。」「朱子語類」易十・上繫上・右第六章「知識日多則知日高、這事也合理、那事也合理。積累得多、業便廣。」「朱子語類」論語十八・子罕篇上・吾有知乎哉章「問「吾有知乎哉」與「吾無隱乎爾」意一般否。」曰「那箇說得闊、這箇主答問而言。」或曰「那箇兼動靜語默說了。」曰「然。」「(2) 本章の集注に「程子曰「聖人之教人、云々。」とある。

(3) 『論語集注』陽貨「古之愚也直、今之愚也詐而已矣。」朱子注「愚者、暗昧不明。」「朱子語類」論語十一・公冶長下・伯夷叔齊章「蓋那人有過、自家責他、他便生怨。然他過能改即止、不復責他、便不怨矣。其所怨者、只是至愚無識、不能改過者耳。」「朱子語類」尚書一・大禹謨「天下之物、精細底便難見、麤底便易見。饑渴寒煖是至麤底、雖至愚之人亦知得。若以較細者言之、如利害、則禽獸已有不能知者。若是義理、則愈是難知。這只有些子、不多。所以說「人之所以異於禽獸者幾希。」言所爭也不多。」「朱子語類」性理一・人物之性氣質之性「問「性分、命分何以別。」曰「性分是以理言之、命分是兼氣言之。命分有多寡厚薄之不同、若性分則又都一般。此理、聖愚賢否皆同。」「朱子語類」大學四或問上・經一章・此篇所謂在明明徳一段「又問「氣則有清濁、而理則一同、如何。」曰「固是如此。理者、如一寶珠。在聖賢、則如置在清水中、其輝光自然發見。在愚不肖者、如置在濁水中、須是澄去泥沙、則光方可見。今人所以不見理、合澄去泥沙、此所以須要克治也。至如萬物亦有此理、天何嘗不將此理與他。只為氣昏塞、如置寶珠於濁泥中、不復可見。」「中庸章句」第一章「天命之謂性。」

朱子注「命、猶令也。性、即理也。」《大學章句》大學章句序「蓋自天降生民，則既莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之稟或不能齊，是以不能皆有以知其性之所有而全之也。」《論語集注》學而「君子務本，本立而道生。孝弟也者，其為仁之本與。」朱子注「或問」孝弟為仁之本，此是由孝弟可以至仁否。」曰「非也。謂行仁自孝弟始，孝弟是仁之一事。謂之行仁之本則可，謂是仁之本則不可。蓋仁是性也，孝弟是用也。性中只有箇仁、義、禮、智四者而已，曷嘗有孝弟來。然仁主於愛，愛莫大於愛親，故曰孝弟也者，其為仁之本與。」《論語集注》陽貨「子曰，鄙夫可與事君也與哉。」朱子注「鄙夫，庸惡陋劣之稱。」《孟子集注》盡心章句上「孟子曰，有事君人者，事是君則為容悅者也。」朱子注「阿徇以為容，逢迎以為悅，此鄙夫之事，妾婦之道也。」《朱子語類》中庸三·第三十三章「因問孔子「空空」、顏子「屢空」與中庸所謂「無聲無臭」之理。曰「以某觀論語之意，自是孔子叩鄙夫、鄙夫空空，非是孔子空空。」《論語集注》論語二十一·先進篇上·回也其庶乎章「顏子屢空，說作「空中」、不是。論語中只有「空空如也」、是說無所得，別不見說虛空處。」《朱子語類》論語十八·子罕篇上·吾有知乎哉章「林恭甫問此章。曰「這「空空」是指鄙夫言。聖人不以其無所有而略之，故下句更用「我」字喚起。」《朱子語類》性理二·性情心意等名義「元來無所有底人，見人胡說話，便惑將去。若果有學，如何謾得他。如舉天下說生薑辣，待我喫得真箇辣，方敢信。」

空空鄙夫，必著竭兩端告之，如何。」曰「兩端，就一事而言。說這淺近道理，那箇深遠道理也便在這裏。如舉一隅，以四角言。這桌子舉起一角，便有三角在。兩端，以兩頭言之。凡言語，便有兩端。文字不可類看，這處與那處說又別，須是看他語脈。」《論語集注》述而「子曰，不憤不啟，不悱不發，舉一隅不以三隅反，則不復也。」朱子注「憤者，心求通而未得之意。悱者，口欲言而未能之貌。啟，謂開其意。發，謂達其辭。物之有四隅者，舉一可知其三。反者，還以相證之義。」《朱子語類》論語七·八佾篇·巧笑倩兮章「因論「起予者商」、「回非助我」等處，云「聖人豈必待二子之言，而後有所啟發耶。然聖人胸中雖包藏許多道理，若無人叩擊，則終是無發揮於外。一番說起，則一番精神也。」《朱子語類》論語七·八佾篇·巧笑倩兮章「「起予」之義者，謂孔子言繪事後素之時，未思量到禮後乎處，而子夏首以為言，正所以啟發夫子之意。非謂夫子不能，而子夏能之以教夫子也。」《論語集注》八佾「子曰，起予者商也。始可與言詩已矣。」朱子注「起，猶發也。起予，言能起發我之志意。」《論語集注》衛靈公「子曰，辭達而已矣。」朱子注「辭，取達意而止，不以富麗為工。」

但只聖人之言、上下本末、始終小大、無不兼舉。」『朱子語類』中庸二・第六章「才卿問「兩端、謂衆論不同之極致。」且如衆論有十分厚者、有一分薄者、取極厚極薄之二說而中折之、則此為中矣。」曰「不然、此乃「子莫執中」也、安得謂之中。兩端只是箇「起止」二字、猶云起這頭至那頭也。自極厚以至極薄、自極大以至極小、自極重以至極輕、於此厚薄、大小、輕重之中、擇其說之是者而用之、是乃所謂中也。若但以極厚極薄為兩端、而中折其中間以為中、則其中間如何見得便是中。蓋或極厚者說得是、則用極厚之說。極薄之說是、則用極薄之說。厚薄之中者說得是、則用厚薄之中者之說。至於輕重大小莫不皆然。蓋惟其說之是者用之、不是棄其兩頭不用、而但取兩頭之中者以用之也。且如人有功當賞、或說合賞萬金、或說合賞千金、或有說當賞百金、或又有說合賞十金。萬金者、其至厚也。十金、其至薄也。則把其兩頭自至厚以至至薄、而精權其輕重之中。若合賞萬金便賞萬金、合賞十金也只得賞十金、合賞千金便賞千金、合賞百金便賞百金。不是棄萬金十金至厚至薄之說、而折取其中以賞之也。若但欲去其兩頭、而只取中間、則或這頭重、那頭輕、這頭偏多、那頭偏少、是乃所謂不中矣、安得謂之中。」才卿云「或問中却說「當衆論不同之際、未知其孰為過孰為不及而孰為中也。故必兼總衆說、以執其不同之極處而半折之、然後可以見夫上一端之為過、下一端之為不及、而兩者之間之為中」。如先生今說、則或問「半折」之說亦當改。」曰「便是某之說未精、以此見作文字難。意中見得了了、及至筆下依舊不分明。只差些子、便意思都錯了。合改云「故必兼總衆說、以執其不同之極

處而審度之、然後可以識夫中之所在、而上一端之為過、下一端之為不及」云云。如此、語方無病。」或曰「孔子所謂「我叩其兩端」、與此同否。」曰「然。竭其兩端、是自精至粗、自大至小、自上至下、都與他說、無一毫不盡。舜之「執兩端」、是取之於人者、自精至粗、自大至小、總括包盡、無一善之或遺。」侷。一作「才卿問「或問以程子執把兩端、使民不行為非。而先生所謂「半折之」、上一端為過、下一端為不及、而兩者之間為中、悉無以異於程說。」曰「非是如此。隱惡揚善、惡底固不問了、就衆說善者之中、執其不同之極處以量度之。如一人云長八尺、一人云長九尺、又一人云長十尺、皆長也、又皆不同也。不可便以八尺為不及、十尺為過、而以九尺為中也。蓋中處或在十尺上、或在八尺上、不可知。必就三者之說子細量度、看那說是。或三者之說皆不是、中自在七尺上、亦未可知。然後有以見夫上一端之為過、下一端之為不及、而三者之間為中也。「半折」之說、誠為有病、合改」云云。」

(6) 『論語精義』に「伊川曰、子曰、二三子、以我為隱乎、吾無隱乎、爾無知之謂也。聖人之教人、俯就之若此、猶恐衆人以為高遠而不親也。聖人之道、必降而自卑、不如此則人不親、賢人之言、則引而自高、不如此則道不尊、觀於孔子、孟子、則可見矣。」とある。『宋儒學案』正公程伊川先生頤「程頤、字正叔、河南人、明道先生之弟也。」

(7) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・吾有知乎哉章「問「伊川謂「聖人之言必降而自卑、不如此則人不親。賢人之言必引而自高、不如此則道不尊。」此是形容聖人氣象不同邪。抑據其地位合當如此。」曰「聖

人極其高大、人自難企及、若更不俯就、則人愈畏懼而不敢進。賢人有未熟處、人未甚信服、若不引而自高、則人必以為淺近不足為。孟子人皆以為迂闊、把做無用。使孟子亦道我底誠迂闊無用、則何以起人慕心。所以與他爭辯、不是要人尊己、直使人知斯道之大、庶幾竦動、著力去做。孔子嘗言「如有用我者、期月而已可也。」又言「吾其為東周乎。」只作平常閑說。孟子言「如欲平治天下、當今之世、舍我其誰。」便說得廣、是勢不得不如此。」又問「如程子說話、亦引而自高否。」曰「不必如此又生枝節。且就此本文上看一段、須反覆看來看去、要爛熟、方見意味快樂、令人都不欲看別段、始得。」淳。寓錄云「程子曰「聖人之言、必降而自卑、不如此則人不親。賢人之言、則引而自高、不如此則道不尊。」不審這處形容聖、賢氣象不同、或據其地位合著如此耶。」曰「地位當如此。聖人極其高大、人皆疑之、以為非我所能及。若更不恁地俯就、則人愈畏懼而不敢進。孟子於道雖已見到至處、然做處畢竟不似聖人熟、人不能不疑其所未至、若不引而自高、則人必以為淺近而不足為。孟子、人皆以為迂闊、把他無用了。若孟子也道是我底誠迂闊無用、如何使得。所以與人辨、與人爭、亦不是要人尊己、只要人知得斯道之大、庶幾使人竦動警覺。夫子嘗言「如有用我者、期月而已可。」又言「吾其為東周乎。」只平常如此說。孟子便道「如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也。」便說得恁地奢邁、其勢不得不如此。這話、從來無人會如此說。非他程先生見得透、如何敢鑿空恁地說出來。」

(8) 『論語精義』に「尹曰、聖人之言、上下皆盡、即其近、則衆人皆可與知。

『論語集注』 訳注(子罕第九(二)) 孫 路易

極其至、則雖聖人亦無以加焉、是之謂兩端。如答樊遲之問仁知、兩端竭盡、無餘知矣。若夫語上而遺下、語理而遺物、豈聖人之言哉。雖鄙夫之問、亦竭兩端以告之也。」とある。『宋儒學案』肅公尹和靖先生焯「尹焯、字彥明、一字德充、洛陽人。少孤事、母陳氏、至孝、年二十因蘇季明以見伊川。」

(9) 『論語集注』為政「樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、無違。」

朱子注「樊遲、孔子弟子、名須。御、為孔子御車也。」

(10) 『論語集注』雍也「樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂

知矣。問仁。曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣。」朱子注「民、亦人也。獲、謂得也。專用力於人道之所宜、而不惑於鬼神之不可知、知者之事也。先其事之所難、而後其效之所得、仁者之心也。此必因樊遲之失而告之。」『論語集注』顏淵「樊遲問仁。子曰、愛人。問知。子曰、知人。」朱子注「愛人、仁之施。知人、知之務。」『論語集注』子路「樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠。雖之夷狄、不可棄也。」朱子注「恭主容、敬主事。恭見於外、敬主乎中。之夷狄不可棄、勉其固守而勿失也。程子曰「此是徹上徹下語。聖人初無二語也、充之則辟面盎背。推而達之、則篤恭而天下平矣。」胡氏曰「樊遲問仁者三、此最先、先難次之、愛人其最後乎。」

(11) 詳しくは、拙著『朱子哲学の研究』(前掲)第四章「朱子の「理」。

第八章

子曰、鳳鳥不至、河不出圖。吾已矣夫。

「鳳鳥至ず」とは、鳳鳥は鳳凰のことであり、雄は「鳳」と言い、雌は「凰」と言う。舜の時にはその音楽「韶」が演奏されると、鳳凰が飛来して容儀があり、周が興る文王の時には鳳凰が「岐山」で鳴いたのだが、いまは、鳳凰が飛来することはないのだ、ということである。「河、図を出ださず」とは、伏羲が天下の王になった時に河から「龍馬」(形が馬に似ている龍)が図を背負って出てきたのだが、いまは河から図を背負った龍馬が現れることはないのだ、ということである。孔子は、「鳳鳥至ず、河、圖を出ださず。」と言われて、当時自国に伏羲、舜、文王のような聖なる王者がいなかったことを嘆かれたのである。「吾已んぬるかな」とは、孔子が、自分の「文章」(礼の徳が外に現れるものとしての礼楽の各種細々な礼儀作法や法令制度や各種経書の文辞)も、その世に役に立つことはもうないのを知った、ということである。)孔子が言われた。「鳳凰は飛んでこないし、河から図も出てこない。私の「文章」も、世に役に立つことはないね。」

集注

夫、音扶。○鳳、靈鳥、舜時來儀、文王時鳴於岐山。河圖、河中龍馬負圖、伏羲時出、皆聖王之瑞也。已、止也。○張子曰「鳳至圖出、文明之祥。伏羲、文之瑞不至、則夫子之文章知其已矣。」

訳

「夫」は、「扶」と発音する。○「鳳」は、靈鳥(つまり、「鳳」は、靈的な鳥である、ということ。雄は「鳳」と言い、雌は「凰」と言う。鳳凰の習性は、「梧桐」(アオギリ)にしか棲息せず、「竹実」(竹の実)しか食べない。鳳凰は、鳥類中の最も靈的な存在であって鳥類が皆鳳凰に従うのである。「靈」とは、「神靈」(ここでは、つまり、仁義礼を感じて信ずる能力)がある、ということである。①、「舜の時來儀し、文王の時岐山に鳴く。」(つまり、舜の時にはその音楽「韶」が演奏されると、鳳凰が飛来して容儀があり、周が興る文王の時には鳳凰が「岐山」で鳴いた、ということ。「韶」は、舜の音楽であり、孔子は「盡美矣、又盡善也。」(美を尽くし、また善を尽くした。)と絶賛されたのである。「岐山」は、周太王(つまり、文王の祖父古公亶父)が岐山で築いた「邑」(町)のことである。②)「河図は、河中の龍馬図を負ひ、伏羲の時出づ。」(つまり、河図は、河の中から龍馬が図を背負い、伏羲が天下の王になった時に出てきた、ということ。「河」とは、「榮河」のことである。「龍馬」とは、形が馬に似ている龍、ということである。「図を負ふ」とは、図を背負っていたということである。伏羲の時に現れた龍馬が背負っていた図についての記述が各種の文献に見えないが、『尚書中候』には、堯の時に、河洛に壇を築いて、龍が「甲」(面積が九尺の亀の甲羅のようなもので、緑色の地に赤色の模様があつてそれが字に見える、こういうもの)を銜えて河から出てきて、その築いた壇に近づき、銜えていた図を置いて去って行った、という記述がある。伏羲が龍馬の図に則つて八卦を書いたという記述が多く文献に見られるが、『易學啓蒙』では、朱

子が「天生神物」（「神物」とは、易の占いの著（めどぎ）や占いの亀のこと）、「天地変化」（草木の生い茂ることが天地変化の現れ）、「天垂象見吉凶」（日月星辰は天が著した象）、「河出圖、洛出書」（この四者が「易」を創作したその由るところだ。）と説明している。^③これらは皆、聖なる王者の瑞祥である。「巳」は、止むことある。○張子（張載、字は子厚、横渠先生^④）が言った。「鳳が飛来し図が現れるのは、「文明」（「文」とは、「文章」である。「明」は、「明著」（「昭著」、つまり、天下に遍く明らかに示すことである。「文章」は、礼の徳が外に現れるものとしての礼楽の各種細々な礼儀作法や法令制度や各種経書の文辞が皆「文章」ある。）の瑞兆である。^⑤「伏羲、舜、文の瑞至らざれば」（つまり、伏羲、舜、文王の瑞兆が現れなければ、ということ。これは即ち「鳳鳥至らず、河、図を出さず」（鳳凰が飛来せず、河から図が現れず）のことであるが、朱子は、「聖人は言葉遣いが謙虚であるのが一般的であるが、「自ら諱むを得ず」（つまり、自ら忌むことができない）時もある。」と説明している。つまり、自国の君主の悪を忌むのは礼の許すことであるにもかかわらず、孔子は「鳳鳥至らず、河、図を出さず」と言われて、当時の世には伏羲、舜のような聖なる王者がいなかったことを明示されたのである。^⑥孔子の「文章」（礼の徳が外に現れるものとしての礼楽の各種細々な礼儀作法や法令制度や各種経書の文辞）も、その世に役に立つことはもうないのである。」

注

（一）『詩經集傳』大雅・生民之十・卷阿「鳳凰于飛、翩翩其羽、亦集爰止。

藹藹王多吉士。維君子使、媚於天子。……。鳳凰鳴矣、于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。拳拳萋萋、離離喑喑。」朱子注「鳳凰、靈鳥也。雄曰鳳、雌曰凰。翩翩、羽聲也。鄭氏以為、因時鳳凰至、故以為喻。理或然也。藹藹、衆多也。媚、順愛也。○鳳凰于飛、則翩翩其羽、而集於其止矣。藹藹王多吉士、則維王之所使、而皆媚于天子矣。既曰君子、又曰天子、猶曰王于出征、以佐天子云爾。」「鳳凰之性、非梧桐不棲。非竹實不食。拳拳萋萋、梧桐生之盛也。離離喑喑、鳳凰鳴之和也。」『孟子集注』公孫丑章句上「有若曰、豈惟民哉。麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥、太山之於丘垤、河海之於行潦、類也。聖人之於民、亦類也。出於其類、拔乎其萃、自生民以來、未有盛於孔子也。」朱子注「麒麟、毛蟲之長。鳳凰、羽蟲之長。垤、蟻封也。行潦、道上無源之水也。出、高出也。拔、特起也。萃、聚也。言自古聖人、固皆異於衆人、然未有如孔子之尤盛者也。」『大學章句』第五章「聞嘗竊取程子之意以補之曰「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈莫不有知、而天下之物莫不有理、惟於理有未窮、故其知有不盡也。」『禮記正義』「何謂四靈、麟鳳龜龍謂之四靈。故龍以為畜、故魚鮪不滄。鳳以為畜、故鳥不獠。麟以為畜。故獸不狘。龜以為畜、故人情不失。」孔穎達疏「正義曰、此一經以上有四靈之文、更復解四靈之事、故記人假問答以明四靈也。」「何謂四靈。麟鳳龜龍謂之四靈」者、問答四靈名也。謂之「靈」者、謂神靈。以此四獸皆有神靈、異於他物、故謂之靈。○「故龍以為畜、故魚鮪不滄」、解飲食有由之義也。滄、水中驚走也。魚鮪、從龍者、龍既來為人之畜、故

其屬見人不恡然驚走也。○「鳳以為畜、故鳥不猛」、猛、驚飛也。鳥從鳳來、鳳既來為人之畜、故其屬見人不猛然驚飛也。○「麟以為畜、故獸不狘」、狘、驚走也。獸、從麟者、麟既來為人之畜、故其屬見人不狘然驚走也。○「龜以為畜、故人情不失」、以龜知人情、龜既來應人、知人情善惡、故人各守其行、其情不失也。然上三靈皆言其長來而族至、則此應云「龜以為畜、而甲族馴狎」、今獨云「其感信而至」者、與上三族相互也。此言感信、則上亦感仁義禮而至也。但因龜是知人情之易見者、故就龜而言耳。又初陳四靈、麟在初者、孔子獲麟、記者隨時所見為先也。後列以龍為首、依四方之舊次也。」

(2)

『史記』夏本紀「蕭韶九成、鳳皇來儀。」裴駟集解「孔安國曰、蕭韶、舜樂名。備樂九奏而致鳳皇也。」『尚書正義』虞書・益稷「蕭韶九成、鳳皇來儀。」孔安國傳「韶、舜樂名。言蕭、見細器之備。雄曰鳳、雌曰皇、靈鳥也。儀、有容儀。備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞。」『國語』「周之興也、鸞鷟鳴於岐山。」韋昭注「三君云、鸞鷟、鸞鳳之別名也。詩云、鳳皇鳴矣、于彼高岡。其在岐山之舊乎。」『詩經集傳』「鳳凰鳴矣、於彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。」朱子注「山之東曰朝陽。鳳凰之性、非梧桐不棲、非竹實不食。」『論語集注』八佾「子謂韶、盡美矣、又盡善也。」朱子注「韶、舜樂。武、武王樂。美者、聲容之盛。善者、美之實也。」『朱子語類』論語七・八佾篇・子謂韶盡美矣章「問「集注「美者、聲容之盛。善者、美之實。」如何是美之實。」曰「據書中說韶樂云「德惟善政、政在養民、水火金木土穀惟修、正德利用厚生惟和。九功惟敘、九敘惟歌。」此是韶樂九章。」

『朱子語類』論語十七・泰伯篇・泰伯其可謂至德章「又曰「公劉時得上一上做得盛、到太王被狄人苦楚時、又衰了。太王又旋來那岐山下做起家計。但岐山下却是商經理不到處、亦是空地。當時邠也只是是一片荒涼之地、所以他去那裏輯理起來。」また、「吳伯英問「泰伯知太王欲傳位季歷、故斷髮文身、逃之荊蠻、示不復用、固足以遂其所志、其如父子之情何。」曰「到此却顧恤不得。父子君臣、一也。太王見商政日衰、知其不久、是以有翦商之意、亦至公之心也。至於泰伯、則惟知君臣之義、截然不可犯也、是以不從。二者各行其心之所安、聖人未常說一邊不是、亦可見矣。」『論語集注』泰伯「子曰、泰伯、其可謂至德也已矣。三以天下讓、民無得而稱焉。」朱子注「泰伯、周大王之長子。至德、謂德之至極、無以復加者也。三讓、謂固遜也。無得而稱、其遜隱微、無跡可見也。蓋大王三子、長泰伯、次仲雍、次季歷。大王之時、商道寢衰、而周日強大。季歷又生子昌、有聖德。大王因有翦商之志、而泰伯不從、大王遂欲傳位季歷以及昌。泰伯知之、即與仲雍逃之荊蠻。於是大王乃立季歷、傳國至昌、而三分天下有其二、是為文王。文王崩、子發立、遂克商而有天下、是為武王。」『史記』周本紀「公叔祖類卒、子古公亶父立、古公亶父復修后稷、公劉之業、積德行義、國人皆戴之。薰育戎狄攻之、欲得財物、予之。已復攻、欲得地與民。民皆怒、欲戰。古公曰「有民立君、將以利之。今戎狄所為攻戰、以吾地與民。民之在我、與其在彼、何異。民欲以我故戰、殺人父子而君之、予不忍為。」乃與私屬遂去邠、度漆、沮、止於岐下。邠人舉國扶老攜弱、盡復歸古公於岐下。及他旁國聞古公仁、亦多歸之。」

於是古公乃貶戎狄之俗，而營築城郭室屋，而邑別居之。」裴駟集解「徐廣曰「分別而為邑落也。」

(3) 『尚書正義』上五經正義表「龍圖出於榮河，以彰八卦，故能範圍天地，埏埴陰陽，道濟四溟。」『尚書正義』周書·顧命「大玉、夷玉、天球、河圖、在東序。」孔安國傳「河圖、八卦。伏羲王天下，龍馬出河，遂則其文以畫八卦，謂之河圖，及典謨皆歷代傳寶之。」『禮記正義』禮運「河出馬圖，鳳皇麒麟，皆在郊輶。龜龍在宮沼，其餘鳥獸之卵胎，皆可俯而闕也。」鄭玄注「馬圖、龍馬負圖而出也。」孔穎達疏「河出馬圖」，按中候·握河紀「堯時受河圖，龍銜赤文綠色。」注云「龍而形象馬，故云馬圖，是龍馬負圖而出。」又云「伏羲氏有天下，龍馬負圖出於河，遂法之，畫八卦。」『尚書中候疏証』（鄭元注、皮錫瑞疏証）「帝堯文明，德政清平，比隆伏羲。（注：伏羲氏有天下，龍馬負圖出於河，遂法之，畫八卦。又龜書，洛出之也。）帝堯即政七十載，（注：或云七十二年）……伯禹拜曰，昔黃帝軒轅，提象，配永循環。（注：軒轅，黃帝名。永，長也。循，順也。黃帝軒轅，觀攝提之象，配而行之，以長順斗機，為政焉。）……鳳皇巢阿閣謹樹。麒麟在囿，（注：麒麟大麋一角，麟似馬而無角，赤目。）鸞鳥在儀。黃帝東巡至洛，河出龍圖，洛出龜書曰咸，赤文像字，以授軒轅。（注：靈龜負書所出黃帝咸，則也。）堯曰，皇道帝德，非朕所專。脩壇河洛，仲月辛日昧明，帝立壇磬，折西向，禹進迎。舜契陪位，稷辨護。（注：進迎，接神也。稷，官名，謂棄。辨護者，供時用相禮儀。）乃沈璧於河，禮備至於日稷。榮光出河，休氣四塞，（注：榮光五色，從河水中出。休，美也。美氣

四塞，炫耀四方也。）白雲起，回風搖，龍馬銜甲，赤文綠色，自河而出。（注：龍而形象馬，故云馬圖，是龍馬負圖而出。赤燦怒之使也。甲所

以藏圖，王者有仁德，則龍馬見也。其文赤色而綠地也。）臨壇止霽，吐甲圖而霽。（注：霽齊，亦止也。霽，去也。）甲似龜背，廣袤九尺，平上五色，類下有赤文似字，上有列宿斗正之度，帝王錄紀，興亡之數。帝乃寫其文，藏之東序。」『易學啓蒙』易學啓蒙一·本圖書第一「易大傳曰，河出圖，洛出書，聖人則之。孔安國云，河圖者，伏羲氏王天下，龍馬出河，遂則其文以畫八卦。洛書者，禹治水時，神龜負文而列於背，有數至九，禹遂因而第之，以成九類。」『易學啓蒙』易學啓蒙二·原卦畫第二「古者包羲氏之王天下也，仰則觀象於天，俯則觀法於地，觀鳥獸之文與地之宜，近取諸身，遠取諸物，於是始作八卦，以通神明之德，以類萬物之情。易有太極，是生兩儀，兩儀王四象，四象生八卦。大傳又言包羲畫卦所取如此，則易非獨以河圖而作也。蓋盈天地之間，莫非太極陰陽之妙，聖人於此仰觀俯察，遠求近取，固有以超然而默契霧其心矣。故自兩儀之未分也，渾然太極，而兩儀、四象、六十四卦之理，已粲然於其中。」『周易本義』繫辭上傳「天一、地二。天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十。」朱子注「此言天地之數，陽奇陰耦，即所謂河圖者也。」『周易本義』繫辭上傳「是故天生神物，聖人則之。天地變化，聖人效之。天垂象見吉凶，聖人象之。河出圖，洛出書，聖人則之。」朱子注「此四者，聖人作易之所由也。河圖洛書詳見啟蒙」『朱子語類』易二·綱領上之下：卜筮「熟讀六十四卦，則覺得繫辭之語直為精密，是易之括例。要之，易書是

為卜筮而作。如云「定天下之吉凶，成天下之亹亹者，莫大乎蓍龜。」又云「天生神物，聖人則之。」則專為卜筮也。」『朱子語類』論語九·里仁篇下·子曰參乎章「徐仁父問「充擴得去，則天地變化、草木蕃充擴不去，則天地閉、賢人隱」、如何。」曰「只管充擴將去，則萬物只管各得其分。只就「己所不欲勿施於人」上面擴充將去，若充之於一家，則一家得其所。充之於一國，則一國得其所。無施而不得其所便是「天地變化、草木蕃」。若充擴不去，則這裏出門便行不得，便塞了、如何更施諸人、此便是「天地閉、賢人隱」底道理。」『朱子語類』鬼神「問問「天地地祇人鬼。」地何以曰「祇」。曰「祇」字只是「示」字。蓋天垂三辰以著象，如日月星辰是也。地亦顯山川草木以示人，所以曰「地示」。」

(4) 『張子正蒙』卷三·三十篇第十一「鳳至圖出、文明之祥。伏羲、舜、文之瑞不至，則夫子之文章知其已矣。」

(5) 『朱子語類』孟子九·告子上·仁人心也章「禮本是文明之理，其發便知有辭遜。」『朱子語類』尚書一·舜典「濬哲文明、溫恭允塞」、細分是八字，合而言之，却只是四事。濬、是明之發處。哲、則見於事也。文、是文章。明、是明著。易中多言「文明」。允、是就事上說。塞、是其中實處。」『論語集注』公冶長「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言行與天道、不可得而聞也。」朱子注「文章、德之見乎外者、威儀文辭皆是也。」『中庸章句』第二十七章「優優大哉。禮儀三百、威儀三千。」朱子注「優優、充足有餘之意。禮儀、經禮也。威儀、曲禮也。此言道之入於至小無間也。」『論語集注』雍也「今也則亡、

未聞好學者也。」朱子注「今人乃謂聖本生知、非學可至、而所以為學者、不過記誦文辭之間、其亦異乎顏子之學矣。」『論語集注』泰伯「巍巍乎、其有成功也。煥乎、其有文章。」朱子注「煥、光明之貌。文章、禮樂法度也。」『朱子語類』中庸二·第十二章「問「上下察」與「察乎天地」、兩箇「察」字同異。」曰「只一般。此非觀察之「察」、乃昭著之意、如「文理密察」、「天地明察」之「察」。經中「察」字、義多如此。」廣闕祖錄云「事地察」、「天地明察」、「上下察」、「察乎天地」、「文理密察」、皆明著之意。」また、「問「上下察」、是此理流行、上下昭著。下面「察乎天地」、是察見天地之理、或是與上句「察」字同意。」曰「與上句「察」字同意、言其昭著遍滿於天地之間。」『中庸章句』第十二章「詩云、鸛飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也。」朱子注「鸛、鳴類。戾、至也。察、著也。子思引此詩以明化育流行、上下昭著、莫非此理之用、所謂費也。」

(6) 『朱子語類』論語十八·子罕篇上·鳳鳥不至章「鳳鳥不至。」聖人尋常多有謙詞、有時亦自諱不得。」『論語集注』述而「陳司敗問昭公知禮乎。孔子曰、知禮。孔子退、揖巫馬期而進之、曰、吾聞君子不黨、君子亦黨乎。君取於吳為同姓、謂之吳孟子。君而知禮、孰不知禮。巫馬期以告。子曰、丘也幸、苟有過、人必知之。」朱子注「禮不娶同姓、而魯與吳皆姬姓。謂之吳孟子者、諱之使若宋女子姓者然。」「孔子不可自謂諱君之惡、又不可以娶同姓為知禮、故受以為過而不辭。」『論語集解義疏』何晏集注「孔安國曰、以司敗之言告也。諱國惡、禮也。聖人智深道弘、故受以為過也。」皇侃義疏「云「諱國惡、禮也」者、

諱國之惡是禮之所許也。」

第九章

子見齊衰者、冕衣裳者與瞽者、見之、雖少必作。過之、必趨。

〔齊衰者〕とは、喪服を着ている者のことである。〔冕衣裳者〕とは、身分の貴い（爵位のある）者のことである。「瞽者」とは、盲目の者のことである。「作」とは、立ち上がることである。「趨」とは、速く歩くことである。

孔子は、齊衰者、冕衣裳者と瞽者、この人を見かければ、たとえ相手が年少者であっても座っている時には必ず立ち上がられるのである。この人の前に通過する時には必ず速く歩いて通行されるのである。

（この章にいう「作」と「趨」は、敬意を表す行為である。「冕衣裳者」に対しては「敬」の心から生じた尊敬（「敬」）の意を表し、「齊衰者」に対しては「敬」の心から生じた哀傷（「哀」）の意を表し、「瞽者」に対しては「敬」の心から生じた憐憫（「閔」）の意を表すのである。聖人の場合、そのようにしようと思わなくてもそのようにすることになるものであり、意識しなくても自ずと身心が表裏一致するものである。）

集注

齊、音咨。衰、七雷反。少、去聲。○齊衰、喪服。冕、冠也。衣、上服。裳、

下服。冕而衣裳、貴者之盛服也。瞽、無目者。作、起也。趨、疾行也。或曰、少、當作坐。○范氏曰「聖人之心、哀有喪、尊有爵、矜不成人。其作與趨、蓋有不期然而然者。」尹氏曰「此聖人之誠心、内外一者也。」

訳

「齊」は、「咨」と発音する。「衰」は、「七」「雷」の反（つまり、「せい」の反）と発音する。現代中国語では「shēi」第一声と発音する。「少」は、去声（第四声、「わかし」（若い）の意である。○「齊衰は、喪服。」（つまり、「齊衰」とは、喪服のことである、ということ。喪服には、「斬衰」「齊衰」「大功」「小功」「緦麻」の五種類があり、「五服」と言うこともある。「五服」は主に、死者との血縁の親疎によって喪中に着用する喪服のことであるが、国君が亡くなられた時には臣下や国民が「斬衰」という喪服を着用するとかという礼の規定もある。「齊衰」は、「斬衰」に次いで重く、主に、妻を亡くした夫や祖父母を亡くした孫などが着用する喪服である。「五服」の制作や着用期間の長さなどについては、それぞれ細かい規定があるのである。）
「冕」は、冠のことである。「衣は、上服。裳は、下服。」（つまり、「衣」は上半身に着用する服であり、「裳」は下半身に着用する服である、ということ。「裳は是れ下体の服」という朱子の説明が見えることから、「上服」は「上半身に着用する服」の意と解する。）
「冕して衣裳するは、貴き者の盛服なり。」（つまり、冠を被って「衣裳」を着用するのは、貴い者の整った服装である、ということ。「盛服」は、冠と衣服を整えることであるが、ここでは、つまり「整った服装」の意だと解する。『論語注疏』の注に「冕とは、冠なり、

大夫の服。」とあり、「冕衣裳」を「大夫の服」と解釈する。^③「瞽」とは、「無目者」(「不能察言觀色」(つまり人の言葉や顔色を観察することのできない人)の意もあるが、ここでは、つまり盲目の人のこと)^④である。「作は、起つなり。趨は、疾く行くなり。」(つまり、「作」は、立つことであり、「趨」は、速く歩くことである、ということ。「齊衰者」「冕衣裳者」「瞽者」を見かければ、たとえ相手が年少者であっても座っている時には必ず立ち上がるのであり、この人の前を通過する時には必ず速く歩いて通行するのであった。「作」(ここでは、つまり、立ち上がること)と「趨」(ここでは、つまり、速く歩くこと)は、敬意を表すものであるが、「冕衣裳者」に対しては「敬」の心から生じた尊敬(「敬」)の意を表し、「齊衰者」に対しては「敬」の心から生じた哀傷(「哀」)の意を表し、「瞽者」に対しては「敬」の心から生じた憐憫(「閔」)の意を表すのである。^⑤或る人が言った。「少は当に坐に作るべし。」(つまり、「小」の字は「坐」の字とすべきである、ということ。「史記」には「齊衰、瞽者を見れば、童子と雖も必ず変ず。」とあるから、「少」の字が正しいであろう。^⑥)○范氏(范祖禹、字は淳甫、もう一つの字は夢得)が言った。「聖人の心は、喪事のある者を哀しみ、爵位のある者を尊び、「不成人」(ここでは、つまり、瞽者)を憐れむ。その「作」と「趨」は、「蓋し然るを期せして然る者有り。」(つまり、思うに、そのようにしようと思識しなくてもそのようにすることになるものである、ということ。「期」には「予期する、望む」の意味があり、ここでは、即ち、意識しなくても立ち上がったたり速く歩いたりすることに「敬」「哀」「閔」の気持ち各自と現れる、ということである。^⑧)尹氏(尹焞、字は彦明、もう一つの字は徳

充^⑨が言った。「これは聖人の誠心であって、「内外一なる者なり。」(つまり、内外(つまり、心身)が一致しているものである、ということ。朱子にあっては、「敬」とは、「主」のことである。ここでは、即ち、聖人は意識しなくても自ずと身心が表裏一致するものである、ということである。^⑩)」

注

(1)「禮記」間傳「父母之喪、居倚廬、寢苦枕塊、不說經帶。齊衰之喪、居聖室、芻翦不納。大功之喪、寢有席。小功、總麻、牀可也。此哀之發於居處者也。父母之喪、既虞卒哭、柱楣翦屏、芻翦不納。期而小祥、居聖室、寢有席。又期而大祥、居復寢、中月而禫、禫而牀。斬衰三升、齊衰四升、五升、六升。大功七升、八升、九升。小功十升、十一升、十二升。總麻十五升去其半、有事其縷、無事其布曰總。此哀之發於衣服者也。」衛湜集說「鄭氏曰「芻、今之蒲萃也。此齊衰多二等、大功小功多一等、服主於受、是極列衣服之差也。」孔氏曰「此明初遭五服之喪、居處之異、及遭父母喪至終服、所居改變之節。又明五服精麤之異、「芻翦不納」、芻為蒲萃、為席翦頭為之、不編納其頭、而藏於內也。亦有斬衰不居倚廬者、則雜記云「大夫居廬、士居聖室」、是士服斬衰、而居聖室也。亦有齊衰之喪、不居聖室者、喪服小記云「父不為衆子次於外。」註云「自若居寢」是也。「有事其縷、無事其布曰總」者、以三月之喪、治其麻縷、其細如絲、故云總麻。以朝服十五升、抽去其半、縷細而疏也。「有事其縷」、事、謂緞治布縷也。「無事其布」、謂織布既成、不緞治其布、以哀在外故也。案喪服記云「齊衰四升。」

此經云「四升、五升、六升。」多於喪服篇二等也。案喪服記「大功八升若九升。」此云「七升、八升、九升。」是多喪服一等也。喪服記又云「小功十升、若十一升。」此云「小功十升、十一升、十二升。」是多於喪服一等也。鄭云「服主於受」者，以喪服之經，主於受服者而言，以大功之殤，無受服不列，大功七升，以喪服父母為主，欲其文相值，故略而不言，記者於是經極列衣服之差，所以齊衰多二等，大功小功多一等也。嚴陵方氏曰「柱廬間之楣，以為之固，故曰「柱楣。」剪廬傍屏蔽之草而飾之，故曰「剪屏。」八十一縷曰升，一服而升數不同者，以有正服、義服故也。所謂喪多而服五者，此也。」『朱子語類』禮二·儀禮·喪服經傳「今人齊衰用布太細，又大功、小功皆用苧布，恐皆非禮。大功須用市中所賣火麻布稍細者，或熟麻布亦可。小功須用度布之屬，古者布帛精粗，皆有升數，所以說「布帛精粗不中度，不鬻於市」。今更無此制，聽民之所為。所以倉卒難得中度者，只得買來自以意擇製之爾。」また、「無大功尊。父母本是期，加成三年。祖父母、世父母、叔父母、本是大功，加成期。其曾祖父母小功，及從祖、伯父母、叔父母小功者，乃正服之不加者耳。」『朱子語類』本朝七·歷代二「或問「文帝欲短喪。或者要為文帝遮護，謂非文帝短喪，乃景帝之過。」曰「恐不是恁地。文帝當時遺詔教大功十五日、小功七日、服纖三日。或人以為當時當服大功者只服十五日，當服小功者只服七日，當服纖者只三日，恐亦不解恁地。臣為君服，不服則已，服之必斬衰三年，豈有此等級。或者又說，古者只是臣為君服三年服，如諸侯為天子、大夫為諸侯，及畿內之民服之。於天下吏民無三年服，道理必

不可行。此制必是秦人尊君卑臣，却行這三年，至文帝反而復之耳。」
(2) 『朱子語類』易五·坤「黃裳元吉」，不過是在上之人能以柔順之道，黃中色，裳是下體之服。能似這箇，則無不吉。」

(3) 『禮記注疏』中庸「齊明盛服，非禮不動，所以脩身也。」孔穎達疏「齊明盛服」者，齊，謂整齊。明，謂嚴明。盛服，謂正其衣冠。是脩身之體也。」『論語注疏』子罕「子見齊衰者，冕衣裳者與瞽者。見之，雖少，必作。過之，必趨。」何晏注「包曰「冕者，冠也，大夫之服。尊。瞽，盲也。」「包曰，作，起也。趨，疾行也。此夫子哀有喪，在位，恤不成人。」邢昺疏「此章言孔子哀有喪，尊在位，恤不成人也。」子

見齊衰者，冕衣裳者與瞽」者，齊衰，周親之喪服也。言齊衰，則斬衰從可知也。冕，冠也，大夫之服也。瞽，盲也。「見之，雖少，必作。過之，必趨」者，作，起也。趨，疾行也。言夫子見此三種之人，雖少，坐則必起，行則必趨。」

(4) 『論語』季氏「未見顏色而言謂之瞽」朱子注「瞽，無目，不能察言觀色。」『論語注疏』子罕「子見齊衰者，冕衣裳者與瞽者。」何晏注「尊瞽，盲也。」邢昺疏「瞽，盲也。」

(5) 『朱子語類』論語十八·子罕篇上·子見齊衰者章「康叔臨問「作與趨者，敬之貌也，何為施之於齊衰與瞽者。」曰「作與趨固是敬，然敬心之所由發則不同。見冕衣裳者，敬心生焉，而因用其敬。見齊衰者，瞽者，則哀矜之心動於中，而自加敬也。呂刑所謂「哀敬折獄」，正此意也。」また、「叔臨問「雖少必作，過之必趨」，欲以「作」字、「趨」字說做敬，不知如何。」曰「固是敬，須是看這敬心所從發處。如見齊衰、

是敬心生於哀。見瞽者、是敬心生於閔。」また、「問「作與趨、如何見得聖人哀矜之心。」曰「只見之、過之、而變容動色、便是哀矜之、豈真涕泣而後謂之哀矜也。」

謂主一、自然不費安排、而身心肅然、表裏如一矣。」

(6) 『史記』孔子世家「見齊衰、瞽者、雖童子必變。」

(7) 『宋史』列傳第九十六「祖禹、字淳甫、一字夢得。其生也、母夢一偉丈夫被金甲入寢室、曰「吾漢將軍鄧禹。」既寤、猶見之、遂以為名。」

『論語精義』「范曰、哀有喪者、所以教民恤窮也。敬有爵者、所以教民嚴上也。矜不成人者、所以教民慎獨也。凡天下之窮、民衆人所輕、聖人所重、是故帝堯不虐無告、不廢困窮、文王發政施仁、必先鰥寡孤獨夫子見之、必為之變、與帝堯文王易、地則皆然也。」『孟子集注』離婁章句下「禹、稷、顏子易地則皆然。」朱子注「聖賢之心無所偏倚、隨感而應、各盡其道。故使禹稷居顏子之地、則亦能樂顏子之樂。使顏子居禹稷之任、亦能憂禹稷之憂。」

(8) 『孟子集注』離婁章句下「孟子曰、大人者、言不必信、行不必果、惟義所在。」朱子注「必、猶期也。大人言行、不先期於信果、但義之所在、則必從之、卒亦未嘗不信果也。」

(9) 『論語精義』「尹曰、哀有喪、尊有爵、不欺其不見、皆聖人之誠心、內外一者也。」『宋史』列傳一百八十七・道学二(程氏門人)「尹焞、字彥明、一字德充、世為洛人。」

(10) 『論語集注』學而「敬事而信。」朱子注「敬者、主一無適之謂。敬事而信者、敬其事而信於民也。」『朱子語類』學六・持守「敬」之一字、真聖門之綱領、存養之要法。一主乎此、更無內外精粗之間。」また、「所